

根香寺所蔵の理兵衛焼

森下友子

1. はじめに

理兵衛焼は高松藩のお庭焼で、御用焼物師の紀太理兵衛が焼いた焼物である。高松焼、御林焼などとも呼ばれていたが、近年では理兵衛が焼いたことから、理兵衛焼と呼ぶようになった。

根香寺は香川県高松市中山町に所在し、高松市と坂出市にまたがる溶岩台地の五色台の青峰山に位置する。天台宗寺院で、四国八十八ヶ所霊場82番札所でもある。開基の年代については貞觀年間（859～877）、天長9年（832）と諸説あるが、「根香寺」の寺院名を確認できる資料から少なくとも鎌倉時代末頃には寺院として成立していたことがわかる。室町時代には衰退したが、生駒藩2代藩主生駒一正や高松藩初代藩主松平頼重によって再興された。特に、松平頼重は真言宗であった根香寺を天台宗に帰宗させ、再興に力を注いだ。また、享保3年（1718）に大火災により堂宇等を失うが、宝曆年間（1751～1763）には5代藩主松平頼恕による大規模な再建が行なわれた⁽¹⁾。このように、根香寺は松平家と係わりが深く、第1表のように松平家からの下賜品と思われる葵文の付く陶器を始め、いくつかの理兵衛焼を所蔵している。ここで紹介するのは根香寺の所蔵する理兵衛焼で、色絵陶器皿と、箱書きのある色絵陶器蓋付碗である。

2. 理兵衛焼

紀太家に残された由緒書をみると、紀太家は代々焼物師を勤めていた家柄であることがわかる⁽²⁾。紀太家の焼物の元祖は森嶋半弥重芳である。重芳は信楽の陶工で、唐人の雲林院何某から製陶を習った。2代目の森嶋作兵衛重利は信楽から京都粟田口へ出て陶業を行っていたところ、正保4年（1647）高松藩初代藩主松平頼重に御用焼物師として登用された。2年後の慶安2年（1649）に京都から高松に転居し、屋敷と紀太理兵衛の名を与えられた。その後、紀太家では代々理兵衛を襲名し、高松藩の御用焼物師を勤めた。明治時代に入り、禄を失ったが、名を理平と改めて引き続き陶業に従事した。現在は14代目が活躍中である⁽³⁾。

理兵衛焼は透明釉の上に青・赤・金などの上絵を施す色絵の陶器で、京焼と作風が似通っており、高松仁清とも呼ばれている⁽⁴⁾。作兵衛重利は京都粟田口から高松に移り住み、藩の焼物師を務めるが、粟

第1表 根香寺所蔵の理兵衛焼一覧

番号	器種	法量	印銘・釉など	備考
1	蓋付碗	口径11.1cm、高7.7cm、底径4.5cm	印銘無し。箱底に「…享保五子五月吉日 茶碗箱…」の墨書。	5個体あり。
		口径10cm、高2.7cm	印銘無し。箱底に「…享保五子五月吉日 茶碗箱…」の墨書。	11個体あり（うち1個体は破片）。
2	皿	口径15cm、高2.7cm	型打ち成形。印銘無し。全個体煤（？）付着。	8個体あり。
3	香炉	口径18.5cm、最大径22cm、高15.5cm	灰釉。破風「高」。葵文貼り付け	
4	台付壺	口径27.5cm、高38cm、底径21cm	灰釉。印銘無し。葵文貼り付け	
5	燭台	底径21.5cm、高さ46cm前後	灰釉。破風「高」。葵文貼り付け	

田口での陶法が高松でも受け継がれたことが予想される。江戸時代の理兵衛焼の作品は松平家とゆかりの深い寺社を中心に多数残されているが、製作時期や製作者が明らかになっているものは数少ない。製作時期が明確な作品は嘉永年間（1848～1854）の年次が記された暦文茶碗2点（個人所蔵）と、天和2年（1682）の年次が記された色絵香炉（さぬき市極楽寺所蔵）の合計3点だけである⁽⁵⁾。また、理兵衛焼には鍋蓋の「高」と破風「高」の印をもつもの、無印のものがあることが知られている。この印は製作年代を知る手がかりとなっており、無印のものは2代目重利の作、鍋蓋「高」は3代目重治、破風「高」は3代目重治以降の作であると伝えられてきた⁽⁶⁾。しかし、近年江戸高松藩上屋敷や高松城跡を始めとする近世遺跡の発掘調査が行なわれ、遺跡からの出土状況を検討した結果、鍋蓋「高」と破風「高」の印はいずれも18世紀中葉以降に使用されたことがわかつてきた⁽⁷⁾。

このように理兵衛焼では製作者や製作時期のわかるものは少なく、詳細な技法の変遷などは明らかになっていない。以下で紹介する色絵陶器は華やかな絵付けが施されており、この中でも蓋付碗は年次のある箱書があり、製作年代を推定する手がかりのある貴重な資料である。

①色絵蓋付碗

色絵蓋付碗は直方体の木箱に納められている。木箱の大きさは外寸で26.7cm×26.5cm、高さ23.2cm、側板の厚みは0.9cm、内寸は24.9cm×24.7cmを測る。木箱の中は十字の仕切り板があり、仕切り板の厚さは1.4cmを測る。側板よりも仕切り板のほうが厚い。各仕切りの中の内寸は11.8cm前後で、口径11.4cmの碗がちょうど入る大きさである。木箱の底の外面には「大工仁木徳兵衛 享保五子五月吉日 茶碗箱 補陀落山長尾寺 現住了意」と墨書がある。この墨書から享保5年（1720）5月に大工仁木徳兵衛が作った茶碗箱で、補陀落山長尾寺の什物であり、その時の住職は了意であったことがわかる。また、蓋の表には「青峰山 利平焼茶碗箱 根香寺什物」と墨書がある。「青峰山」は根香寺の山号で、この箱は「利平焼」の茶碗箱で、根香寺の什物であることが記されている。蓋と箱本体の墨書とは内容が異なるが、蓋と木箱本体とは樹種も異なっているので、蓋はあとで作り直されたものと考えられる。

この箱の中には蓋付碗の蓋11個体、碗5個体が収納されている。蓋の天井部径は3.8cm、口径10.4cm、高さ2.6cm、器壁は0.2～0.5cm程度を測る。蓋のつまみの上端面は無釉で、それ以外には薄い透明釉を掛け、その上から菊の花を描く。上絵の具は分厚く、盛り上がっている。菊の花5個のうち1個の花びらは青色で、4個の花びらは赤色である。茎はいずれも青色である。菊の花の周囲にはスペード状の緑色の葉がある。

碗は口径11.4cm、底径4.5cm、高さ8.6cm、器壁は0.4～0.5cmを測る。筒状を呈し、体部下部外面から高台は無釉である。口縁部から体部には透明釉を掛け、その上から5個の菊の花と葉を描く。蓋同様上絵の具は分厚く、盛り上がっている。菊の花のうち1個は青色で、4個は赤色である。茎は青色で、花の周囲には緑色の葉がみられる。高台内には回転ヘラ削りによる渦巻き状の凹みがみられる。回転ヘラ削りの方向は右回転である。蓋・碗ともに破風「高」の印銘はない。

②色絵陶器皿

色絵陶器皿は直方体の箱に収められている。この箱の蓋には「向附皿 八枚内二枚破損」と墨書されている。この箱の中に破損した個体を含め、色絵陶器皿は8個体ある。概ね口径14.5cm、底径7.4cm、高さ4.5cm、器壁は0.3～0.5cmを測る。蓋付碗よりも器壁が若干薄い。内型を使った型打ち成形で、口縁部は内側にくびれ、輪花を呈し、真上からみると、六枚の花びらが開いているように見える。底部外面は無釉で、底部以外には透明釉を施す。蓋付碗に比べると釉は分厚く、貫入は大きい。体部内面には

釉の上から菊と唐草文を描く。菊の中央と唐草のつるは金色、菊は赤色と紺色である。唐草の葉は緑色で細長い。底部と体部の境界には金色と緑色で六角形を描き、その内側に梅の木と花を描く。梅の花は紺色と緑色、木は紺色、葉は緑色である。葉の緑色は蓋付碗よりも透明感がある。そのほか、赤色の花がある。底部外面の回転ヘラ削りの方向は右回転である。この皿にも破風「高」の印銘はない。なお、これらの皿はすべて露体部分や貫入が黒ずんでいる。根香寺では享保3年（1718）に大火災が発生したが、被災したためであろうか。

3. 箱書と色絵陶器

以上の色絵陶器蓋付碗と色絵陶器皿は赤・青・緑・金で花や唐草が華やかに絵付けされており、破風「高」の印はない。皿は碗よりも釉は分厚いが、器壁が薄く、瀟洒な作りである。蓋付碗の木箱には享保5年（1720）に大工仁木徳兵衛が作ったもので、長尾寺の什物であることが墨書されている。この長尾寺は現存する寺院で、香川県さぬき市長尾西に所在する。根香寺と同じく天台宗寺院で、四国八十八カ所霊場87番札所である。長尾寺は高松藩主松平頼重が天和元年（1681）に堂塔を寄進し、元禄2年（1689）頼重の命により、真言宗から天台宗に帰宗しており、頼重との関係も深い⁽⁸⁾。箱書の内容から、この「茶碗箱」は享保5年（1720）に作られ、長尾寺の什物であったが、その後、根香寺に渡ったことがわかる。

ここで問題になるのは茶碗箱には現在納められている蓋付碗が享保5年（1720）から収納されていたかどうかということである。箱には十字の仕切りの中に蓋付碗を入れると、ちょうど納まる大きさであるので、この茶碗箱は現在収納されている蓋付碗のために作られたように思われる。この場合蓋付碗は箱が作られる享保5年（1720）5月より少し前に焼かれたことになる。

では、蓋付碗は享保年間（1716～1736）に他地域でもみられるのであろうか。肥前では17世紀終末頃からみられるようになるが、一般化されるのは18世紀後半以降である⁽⁹⁾。また、京焼では尾形乾山の築いた鳴滝乾山窯跡（1699～1712）の出土品の中に蓋付碗はみられる⁽¹⁰⁾。これらのことから、享保5年（1720）頃に理兵衛が蓋付碗を焼いていたことは不自然ではない。

理兵衛焼ではいつ頃からこのような色絵陶器を焼いているのであろうか。理兵衛焼における色絵の開始についてはまだよくわかっていない。京都粟田口から高松に転居した作兵衛重利の作と断定できる作品がほとんどないためである。作兵衛重利が京都粟田口から高松に転居したのは慶安2年（1649）である。京焼の色絵技法を大成した野々村仁清は正保4年（1647）に御室に開窯したと推定されている。したがって、作兵衛重利が京都在住時に京焼の色絵の陶技を見聞していた可能性は高い。また、紀太家には陶器に絵付けした錦絵師もいたことが紀太家由緒書からわかる。紀太家由緒書には錦絵師である岩佐家の由緒書もいっしょに綴じられている。これをみると、岩佐家は延宝3年（1675）京都より転居後、紀太家と作陶をともにしており、当時の京焼での色絵技法を理兵衛焼に取り入れたことが予想される。なお、岩佐家が高松に来た7年後の天和2年（1682）の年次が記された色絵香炉（さぬき市極楽寺所蔵）には赤色・青色・緑色・金色で上絵付けされていることから、17世紀後半には理兵衛焼で色絵陶器を製作していたことは間違いない。

18世紀前半の京焼では享保17年（1732）の箱書を持つ「色絵牡丹唐草透彫七宝繫文六角壺」（京都市西京区善峰寺所蔵）でみられるように透明釉を掛け、青と緑色の2色が厚く塗られた上絵を基調として金彩を施した比較的地味な色絵陶が典型であり⁽¹¹⁾、この時期に赤絵の具の使用はほとんどみられない。根香寺の蓋付碗は菊の花を赤絵の具で描いており、墨書の年次の享保5年（1720）年頃に焼かれたもの

かどうかは今後さらに検討を要すると思われる。また、皿は蓋付碗に比べると、作りは細かく、緑色もやや透明感が強いことから、蓋付碗よりも若干古い時期に作られたものと推定される。

4. おわりに

根香寺の蓋付碗が享保5年（1720）頃に焼かれたとすると、この時期の理兵衛は元禄17年（1704）から元文2年（1737）に焼物師として仕えた4代目理兵衛行高である。理兵衛焼の茶碗は享保7年（1722）まで將軍家へも献上されている⁽¹²⁾が、献上されたのはこのように華やかな絵付けが施された色絵陶器であった可能性が高い。

根香寺の蓋付碗や皿をはじめ、理兵衛焼には優美な作品が数多く伝わっている。近年、江戸高松藩上屋敷、高松城跡をはじめとする近世遺跡の発掘調査が行なわれ、年代比定の研究が進む肥前陶磁器などの共伴から理兵衛焼の製作年代を検討することが可能となってきた。だが、理兵衛焼は京焼と類似していることから、破風「高」の印銘のないものは断定し難く、18世紀中葉以前の理兵衛焼の様相については不明な点が多い。今回紹介した理兵衛焼は年次の箱書がある資料である。この年次が理兵衛焼の製作年代を示すものかどうかは再考を要すると思われるが、今後、引き続き調査を実施し、理兵衛焼の特徴とその変遷について検討を重ねたい。

最後になりましたが、本稿を成すにあたり、根香寺の方々をはじめ、尾野善裕・佐藤 隆・鈴木裕子・千葉幸信・畠中英二・平尾政幸の各氏にご教授いただきました。記して、感謝申し上げます。

註1 御厨義道「根香寺の歴史」『ミュージアム調査研究報告』第4号 香川県立ミュージアム 2012

2 森下友子「紀太家由緒書」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』5 香川県埋蔵文化財センター 2009

3 紀太家由緒書では紀太家の焼物師の祖を初代、初代の理兵衛を2代目としており、当代は紀太家の焼物師の初代から数え、14代目を名乗っている。ここでは、初代の理兵衛を2代目として報告する。

4 佐藤雅彦「高松焼理兵衛」『日本の美術』28 京焼 至文堂 1968

5 森下友子「理兵衛焼・富田焼」『四国・淡路の陶磁器—砥部焼・屋島焼の生産と流通—』第9回四国城下町研究会〔発表要旨・資料集〕 四国城下町研究会 2008

6 豊田基「讃岐のお庭焼について」『香川県文化財調査報告』9 香川県教育委員会 1968

7 註5と同じ

8 四国靈場第八十七番札所長尾寺公式ウェブサイト

9 大橋康二「肥前磁器の変遷—器の種類からみた—」『柴田コレクションⅧ—華麗なる古伊万里の世界』佐賀県立九州陶磁文化館 2002

10 鄭銀珍「近世における京焼と茶碗の動向—鳴滝乾山窯跡出土の碗類を中心として—」『アート・リサーチ』第10号 アートリサーチセンター 2010

11 岡佳子「近世京焼の展開」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会 2001

12 享保7年（1722）將軍徳川吉宗が献上品の削減を令したため、高松藩の献上品の中から茶碗を削除した。このことは紀太家由緒書にも触れられており、4代目行高は焼物の献上を差し止められ、京都に御用を命ぜられて、無祿になったとある（森下友子「高松藩理兵衛焼」『幕藩体制下で例年献上された陶磁器』第1回 近世陶磁研究会資料 近世陶磁研究会 2011）



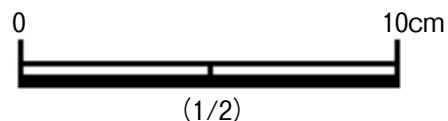
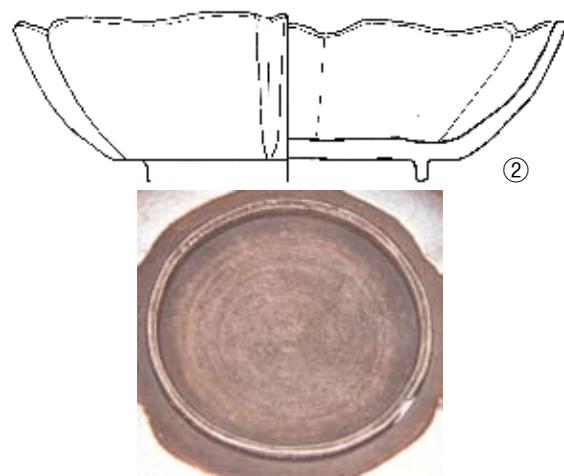
根香寺の位置



根香寺本堂



根香寺色絵蓋付碗箱



根香寺所藏理兵衛焼